



春日井市遺跡解説パンフレット その5

白山神社古墳

－「味美」への定着と古墳群の展開－



味美古墳群と白山神社古墳を巡る歴史的背景

～ 味美への定着と百塚の幻影をめぐって～

幻の百塚と白山神社古墳

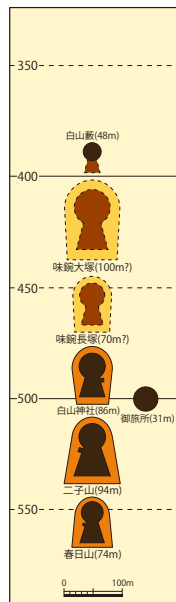
白山神社古墳は、庄内川右岸の氾濫原 標高8～9m [旧 味鏡村/現 名古屋市北区]から氾濫原に臨む低位段丘島居松面 標高10～11m [旧 味美村/現 春日井市]にかけて分布する味美古墳群の中の1基で、5世紀末葉～6世紀初頭の築造と推定される墳長79m [註]の前方後円墳である。

味美古墳群は、戦中～戦後にかけての耕地整理や後の市街地化により大部分が未調査のまま滅失し、味鏡神社・護国院が所蔵する鏡・石製品等の出土遺物がかつての古墳群を物語る数少ない物証となっている。現存するのは3基の前方後円墳[白山神社古墳・二子山古墳・春日山古墳]と1基の円墳[御旅所古墳]のみとなったが、明治17年・20年の地籍図によると、古墳の可能性がある地割、あるいは地目としての「塚」が旧味鏡村で29か所、旧味美村(明治20年当時は味鏡原新田・明治22年に改称)で11か所確認できる。また、旧味鏡村には「大塚前」・「大塚裏」・「岩屋堂」・「伊勢山」等の地名のほか、一帯を「百塚」と称したと伝え、これらの中には前方後円墳の可能性がある味鏡大塚古墳[推定墳長約100m]、味鏡長塚古墳[推定墳長約70m]が含まれている。

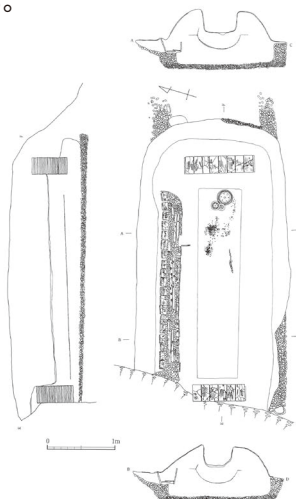
昭和25年、白山藪古墳は土取り中に主体部が露出したため、南山大学による緊急の発掘調査が実施され、埴を用いた特異な粘土槨・副葬品室を検出した。埴の主体部等への使用は国内では類例がなく、渡来系の技術・思想と関連する可能性がある。副葬品の三角縁神獣鏡・玉類・鉄剣・鉄斧等から4世紀後葉の築造と推定され、味美古墳群最初の首長墓と考えられる。

味美古墳群は、4世紀後葉の白山藪古墳から始まり、地籍図により復元された味鏡大塚古墳・味鏡長塚古墳を5世紀代に比定し、白山神社古墳・二子山古墳を経て、6世紀中～後葉の春日山古墳に至る約150年の間に、6基の前方後円墳を継続的に

築造した可能性がある。百塚の幻影は、県内屈指の古墳群・首長墓系譜の復元へとつながる。



味美古墳群編年表



白山藪古墳主体部実測図

「味美」への定着と古墳群成立の歴史的背景

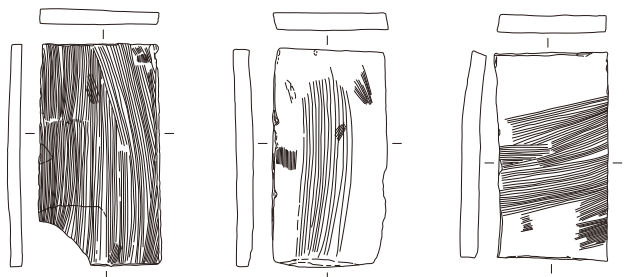
味美古墳群周辺の弥生～古墳時代の集落遺跡としては、味鏡B遺跡[名古屋市北区]が唯一の調査事例であるが、調査面積が限定的なこともあり、集落としての具体的な様相は不明である。現状では、市街地化等による物理的な制約を伴うが、古墳群の築造母体となった集落遺跡は確認されておらず、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落の発展過程を跡付けることは困難である。

味美古墳群の成立・展開の歴史的背景を巡る仮説としては、白山藪古墳の築造主体が他地域から「味美」へと定着し、鉄製農具を用いた庄内川の氾濫原の開拓や陸水路の交わる交通要衝に立地する地の利を活かして交易に関与し、前方後円墳を継続的に築造するに至る勢力基盤を確立していったと想定される。

なお、白山藪古墳の埴に象徴されるように、古墳群成立期において、渡来系氏族の関与や文物の移入が想定される点は、被葬者像や古墳群の性格を考える上で重要な要素である。



味美古墳群航空写真



白山藪古墳出土埴実測図
出典『愛知県史 資料編3 古墳』

[註：発掘調査による築造当時の推定墳長79mのほか、測量調査に基づく現況規模では墳長86m・84m・82mとする解釈がある。]

味美古墳群と断夫山古墳、尾張氏と継体天皇

味美古墳群は、白山神社古墳に続く6世紀前葉の二子山古墳において最盛期を迎え、6世紀代の尾張地域では墳長150mの断夫山古墳[名古屋市熱田区]に次ぐ規模・墳長94mを誇る。また、墳丘(前方後円墳)の規格は、時の大王墓である今城塚古墳[大阪府高槻市]と共通し、墳長190mの今城塚古墳に対して約8割の相似形が断夫山古墳、約5割が二子山古墳に相当する。

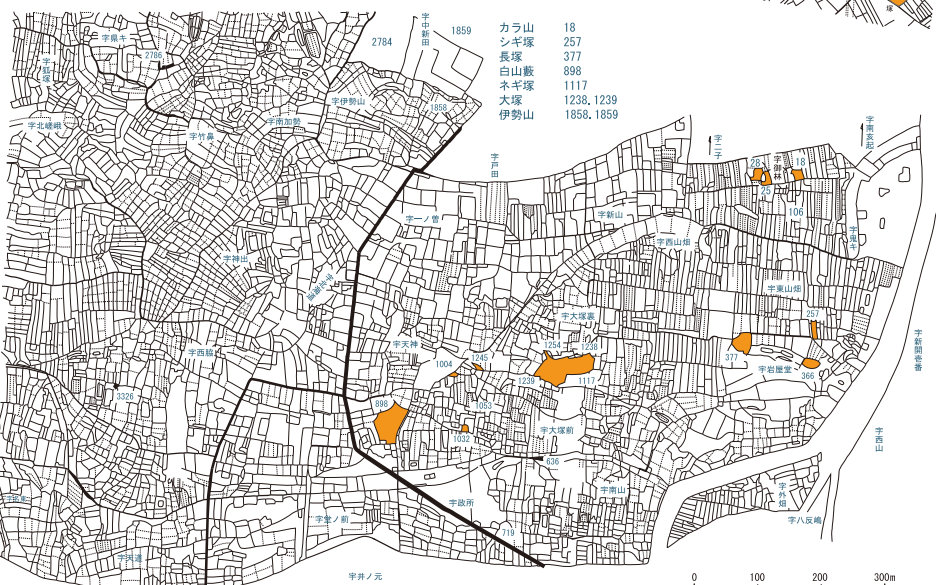
6世紀代に入ると、古墳の規模は全国的に縮小傾向を迎えるが、尾張では対照的に前方後円墳の築造が活発化し、地域最大の断夫山古墳を現出するに至る。

武烈天皇の後の王統が絶え、5～6世紀代の古代史上の激動の時代において、継体天皇擁立を巡る近江・越前等の継体支持勢力の中で尾張氏が有力な地位を占めるに至った点は、尾張連草香娘目子媛が皇妃となり、二人の皇子が安閑・宣化として皇位を継承したことからもうかがえる。天皇の外戚として、ヤマト王権の中核へと勢力を拡大した尾張氏にまつわる歴史的事象と、尾張地域における前方後円墳の急増・巨大化による最盛期の様相は整合的である。

尾張地域最大、かつ6世紀代では東日本最大の断夫山古墳について、熱田神宮を奉賛し、名古屋台地を本貫地とした古代豪族尾張氏所縁の古墳とする見解は、考古学・文献史学ともに一致した有力な説である。



味美古墳群航空写真(南東から・拡大)



明治20年 味美原新田地籍図[上]・明治17年 味美村地籍図[下]

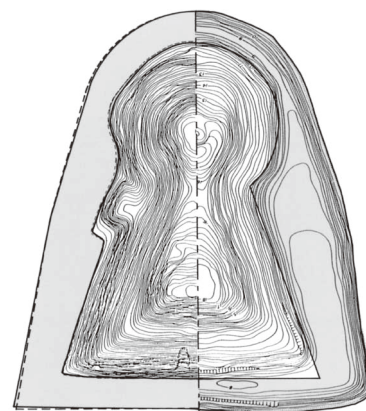
味美古墳群とヤマト王権

二子山古墳は、継体天皇の真陵とされる今城塚古墳や尾張氏所縁の断夫山古墳と同一の墳丘規格を採用し、また、今城塚古墳に類する墳丘外堤上の壮大な埴輪群像にも共通要素が認められる。墳丘規格・埴輪祭祀の共通性と墳丘規模の格差による階層性は、味美古墳群と尾張氏、ヤマト王権との政治的な連携関係を示唆する。

また、味美古墳群とヤマト王権との関係は、春日部郡内に所在した雄略天皇の春日大娘皇女の御名代部を春日氏が管理したことに郡名の縁起を求める仮説や安閑天皇の皇后 春日山田皇女の間敷屯倉を春日井市勝川町付近一帯に比定する仮説からも想定される。御領の存在は古代豪族春日氏の動向と相まって、味美古墳群の由緒・性格を類推する上で示唆的であり、概ね白山神社古墳・春日山古墳の被葬者が活躍した時期に比定される。

6世紀代における前方後円墳の動向からみて、尾張北部一帯では味美古墳群が最有力の存在であることから、尾張氏と目される尾張南部の名古屋台地の勢力は、北部の味美の勢力と連携することで、実質的な尾張地域の統合を達成したと推測される。

文献による尾張氏台頭の歴史的背景として、考古資料からは、前方後円墳の動向(墳丘規格の共有)が示す地域統合による安定的な勢力基盤の形成と東山窯=窯業(須恵器・埴輪生産)・海浜部の製塩遺跡等、生産遺跡の掌握が傍証として挙げられる。



熱田・断夫山古墳 味美・二子山古墳

墳丘規格の比較



二子山古墳 溝状遺構埴輪出土状況

白山神社古墳の墳丘構造

～ 発掘調査成果と測量図の比較を通じて ～

白山神社古墳と白山神社

白山神社古墳は、愛知県春日井市二子町2-11-3に所在し、遺跡名の由来となった白山神社の境内地の一面を占め、墳丘上には本殿・拝殿等が造営されている。墳丘は社殿造営により墳頂部の削平整地等の改変が認められるが、周辺の市街地化とは対照的に、墳形や周溝等の構造ともに比較的良好な保存状態を留めている。

白山神社は、万治2（1659）年に味鋺村[名古屋市北区]より遷座し、二子山古墳に所在したとされる物部神社を合祀して建立され、大正7（1918）年には春日山古墳に所在した春日社を合祀した。

白山神社古墳の測量調査と墳形・規模

白山神社古墳に関する考古学的な調査としては4回の測量調査と平成19年にトレンチによる発掘調査が実施されている。各測量調査による墳丘規模は次のとおりで、墳長をはじめとする数値の差は、精度の問題よりも墳裾の図化範囲及び測量図に対する計測手法（測点）の差に起因する。

図1：墳長81m・後円部径50m・同高7m・前方部幅47m・同高5m

図2：墳長84m・後円部径48m・同高6m・前方部幅47m・同高5m

図3：墳長86m・後円部径48m・同高6.5m・前方部幅48m・同高5m

図4：墳長82m・後円部径51m・同高7.4m・前方部幅48m・同高5.6m

発掘調査成果によると、墳丘封土の一部が流失して墳裾に堆積したことが判明し、本来の規模は現況よりも縮小する可能性がある。後円部径は46mと推定され、前方部は現況の石段・池により調査不可能であるため不確定要素を残すが、石段により張り出した部分を除外し、築造当初の墳丘の推定復元値は墳長79mとなる。

前方部を西に置き、墳丘の中心主軸はわずかに北西(N-75°-W)に向いている。前方後円墳の築造規格としては、後円部径と前方部の幅と長さがほぼ等しく、また、後円部墳頂の方が約1.5m高く、前方部が未発達な中期古墳の特徴を残している。白山神社古墳に続く二子山古墳と比較すると、墳長94mの差は前方部の長さ起因し、前方部の幅は白山神社古墳の48mを大幅に上回る65mで、前方部が大きく拡張し、発達した状況＝後期古墳の特徴が明らかである。

墳丘の中段には幅約3mの平坦面が巡り、前方部・後円部とも2段築成と考えられる。前方部のくびれ部付近には、南北両側に張り出し部分があり、いずれも造り出しの可能性があるが、確証は得られていない。特に北側は、小社を祀る土台として前方部平坦面と連続する形で整地されており、後世の造作とも考えられる。



白山神社古墳 現況

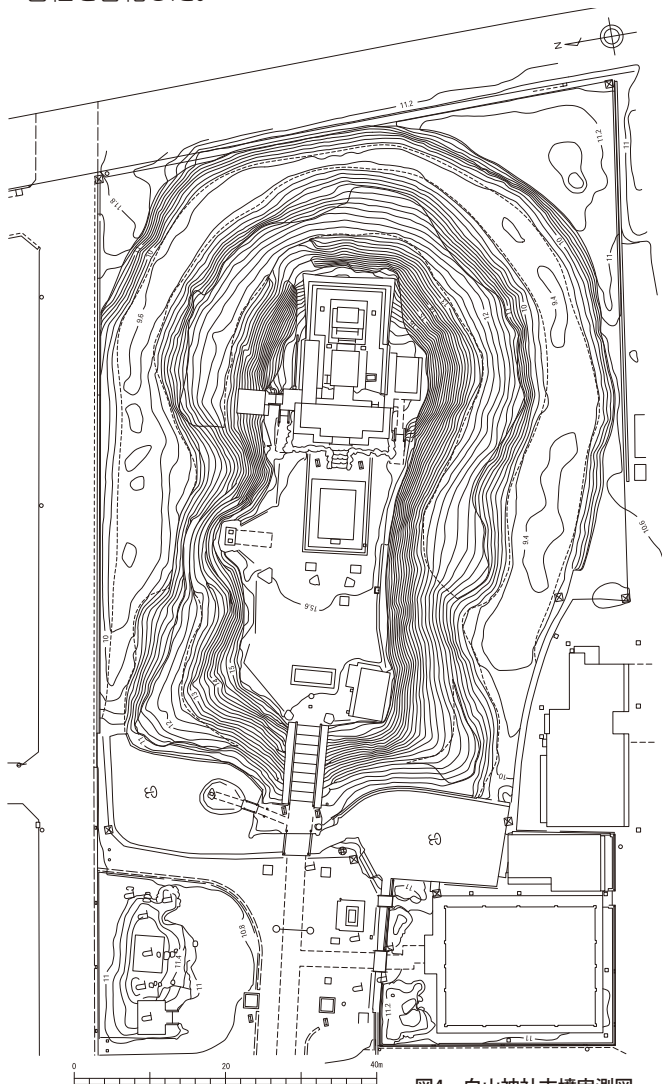


図4 白山神社古墳実測図
(縮尺1/1,000)



明治21年地籍図にみる味美古墳群

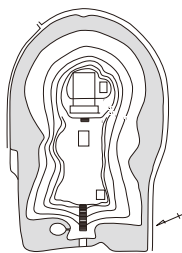


図1 白山神社古墳実測図
(縮尺約1/3,000)

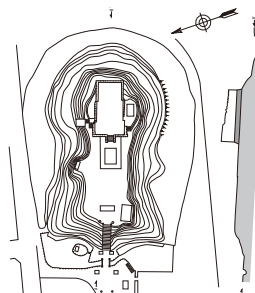


図2 白山神社古墳実測図
(縮尺1/3,000)

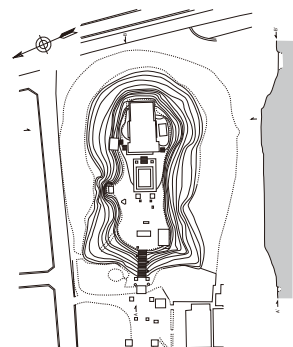


図3 白山神社古墳実測図
(縮尺1/3,000)



封土の露出した下段斜面(後円部)



前方部中段平坦面 埴輪列検出状況



前方部上段斜面(緩傾斜面) 葺石検出状況



後円部上段斜面(急傾斜面) 葺石検出状況

白山神社古墳の内部主体・外部構造

埋葬施設(主体部)については、後円部墳頂に本殿が所在し、物理的に調査が不可能となっている。また、社殿造営等に伴う出土遺物や主体部にまつわる伝承・記録を欠くため、不明である。

一方、二子山古墳では、明治年間に盗掘に遭い石材が出土したとの記録がある。また、春日山古墳では度々大形の石材が掘り出され、一部は白山神社に運ばれ、石碑の土台等として転用されたという。

また、白山神社古墳と同時期、5世紀末葉～6世紀初頭に築造された墳長45mの前方後円墳である池下古墳[名古屋守山区]では、石組による排水施設の一部が検出されており、主体部は尾張地域最古の横穴式石室と考えられている。白山神社古墳の築造時期が尾張地域における横穴式石室の導入期に相当する点から、主体部は横穴式石室であった可能性も考えられる。

その他、墳丘の外部構造としては、前方部に向かってすばまる馬蹄形の周溝が現存し、明治21年の地籍図によっても同様な形態が確認できる。周溝は、前方部の最も狭い部分で幅約3m、後円部は幅約8～10mで巡っている。

発掘調査により、段築平坦面において埴輪列を検出し、墳頂にも埴輪列が巡ったと考えられる。葺石は、段築平坦面より下位の下段斜面には本来的に存在せず、上段斜面のみに被覆したと考えられる。

実測図出典

図1：『愛知県史跡名勝天然記念物調査報告第十三』1935年

図2：昭和41年春日井市教育委員会測量『春日井市史資料編3』1973年

図3：昭和44年愛知県教育委員会測量『重要遺跡指定促進調査報告-地形測量調査の概要-』1974年

図4：平成19年春日井市教育委員会測量『白山神社古墳』2013年

白山神社古墳の土木技術 ～封土・葺石の構築手順～

墳丘の構築手順として、周溝部分の地山(自然堆積層)を約1.5m掘り下げ、整形することで、墳丘高(後円部7.4m・前方部5.6m)の約1/4～1/5に相当する部分が完成し、残りを人工的な盛土=封土により形成する。封土は、墳丘の中心から外側へ向かって、高さ約30cmでおおよそ水平に、色調・土質の異なる黄灰～茶灰色・茶褐色系の粘質土、砂混じり土をおおよそ交互に重ねて叩き締めている。墳丘は、高さ約30cmの水平積み上げの単位を繰り返すことにより構築し、築造後約1500年を経ても流失することなく原形を留めている。封土は、基本的に地山そのものの土質を残しており、周溝の掘削と平行して、順次掘削土を積み上げ、不足する土砂を他所から運搬したと推測される。

墳丘横断面によると、墳裾は周溝との明瞭な屈曲部を有し、中段平坦面へと45度の急傾斜で立ち上がる。約3mの幅広い段築平坦面を経て、上段斜面は段築平坦面から連続する5度の緩斜面から20度・20度以上の傾斜変換点を経て墳頂部に至る。

葺石は墳丘外観の視覚性を高め、封土の流失抑止の機能を有するが、白山神社古墳では上段斜面のみ検出し、下段斜面は封土が露出した状態となる。石材は、10～20cm大を中心とするやや不揃いな川原石を用いており、段築平坦面から続く緩斜面では平面的に敷き詰めたような状況を呈し、石積みとしては規則性に乏しい。また、葺石最下段の所作として、基底石に相当する列状に配した大形・安定感のある石材は未検出である。墳丘の緩傾斜から急傾斜への転換点から、個々の石材を封土に対して斜めに突き刺し、上下に一定の重なりを設けており、傾斜面に応じて構築手法に変化が認められる。下段斜面は45度の急傾斜のため、物理的に葺石の被覆が困難であり、葺石の有無は墳丘の構築方法とも関連すると考えられる。

白山神社古墳の埴輪

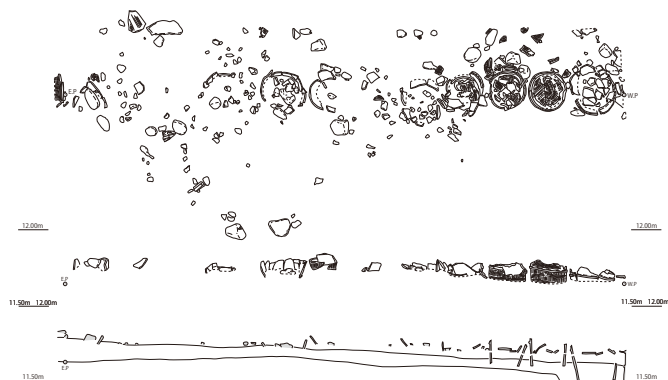
～ 円筒埴輪の規格化現象と型式変化 ～



前方部中段平坦面埴輪列検出状況



同左・拡大



前方部中段平坦面埴輪列検出状況(縮尺1/50)



白山神社古墳出土円筒埴輪

白山神社古墳の埴輪列

発掘調査により、前方部の中段平坦面において、古墳築造当時の原位置を保持した埴輪列の一部を検出した。それによると、段築平坦面の内側(上段斜面との境界付近)を幅46～68cm・深さ4～8cmの浅い溝状に掘りくぼめ、溝の中心に円筒埴輪を据え置き、基底部を5cmほど埋め戻して固定している。円筒埴輪は口縁部が互いに密接した状態で配列し、円筒埴輪5ないし6本置きに朝顔形埴輪を配したことが判明した。また、朝顔形埴輪の基底部は、円筒埴輪の基底部より5cmほど高く、配列時には基底部の突帯(第1突帯)を相互に揃えて配列するため、朝顔形埴輪の掘形をやや深く掘り込んでいることが確認された。

埴輪列を検出する過程で、円筒埴輪の内部や周辺から多くの破片が出土した。この点からは、墳丘の自然崩落が始まった段階においても多くの埴輪が自立しており、経年劣化により損壊した破片が自然落下し、葺石の転石や封土の崩落土に埋没したと考えられる。



埴輪列の掘形と突帯の位置関係(右端が朝顔形埴輪)



埴輪列検出過程



形象埴輪出土状況

白山神社古墳の形象埴輪

円筒埴輪は、段築平坦面のほか、上段斜面からも出土しており、墳頂部平坦面にも埴輪列が巡ったと考えられる。そのほか、形象埴輪の破片がわずかではあるが、周溝埋土内から出土しており、形象埴輪の配列区画が墳丘上に存在した可能性が考えられる。

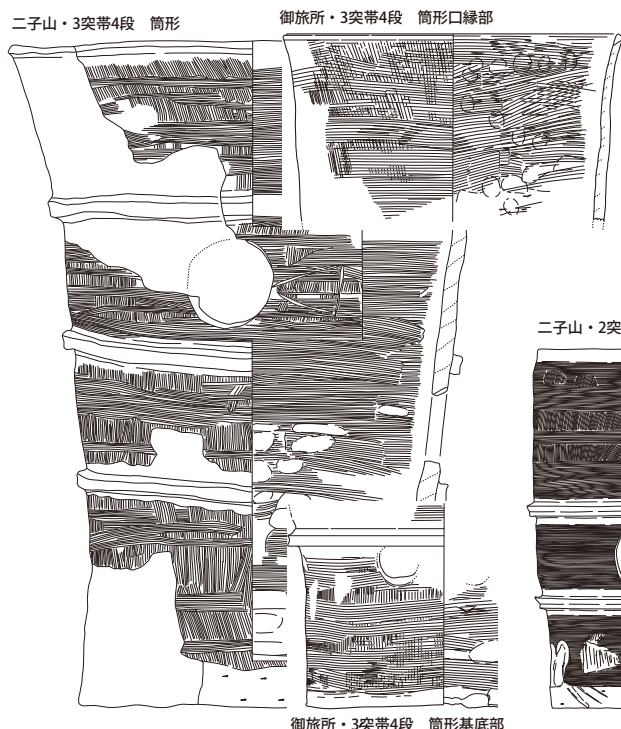
形象埴輪は、人物埴輪の冠ないし帯と考えられる小片、盾・家の一部と推定される破片があるが、種類や数は限定的である。白山神社古墳に続く二子山古墳に想定される外堤上の埴輪群像とは、埴輪祭祀の在り方として完全に相違するが、人物埴輪の破片を比較する限り、製作技法や写実的な意匠表現は極めて類似性が高く、埴輪の生産体制・技術は二子山古墳へと継承されたと考えられる。



二子山古墳出土埴輪



白山神社古墳出土円筒埴輪



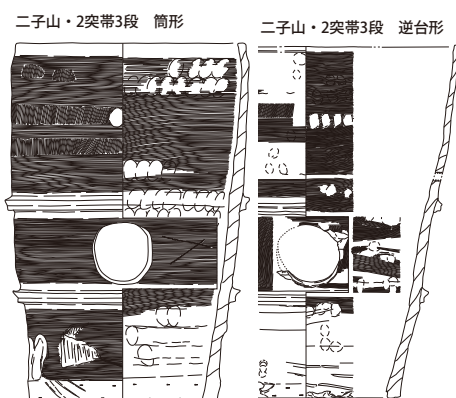
二子山・3突帯4段 筒形

御旅所・3突帯4段 筒形口縁部



御旅所古墳埴輪列検出状況

人物埴輪[左：白山神社古墳・右：二子山古墳]



二子山・2突帯3段 筒形

二子山・2突帯3段 逆台形



白山神社・2突帯3段 筒形大型

白山神社・2突帯3段 筒形小型

味美古墳群出土円筒埴輪各種(縮尺1/8)

白山神社古墳の円筒埴輪

白山神社古墳の円筒埴輪は2突帯3段で、口径と底径がほぼ等しい筒状形態を呈し、法量には大小2種類の規格が存在する。

大型は口径31.5cm・底径27.8cm・器高47.5cm、小型は口径25.7cm・底径20.1cm・器高38.0cmである。

朝顔形埴輪は、埴輪列として原位置を保持した基底部以外の部位の残存状況が悪く、実測図化による復元値では、口径約60cm・底径23.3cm・器高約80cmと推定される。底径による比較では、大小の円筒埴輪の中間的な規模であり、円筒埴輪とは別の規格として製作されたと考えられる。

尾張型埴輪の型式変化

味美古墳群では、5世紀末葉から6世紀前葉にかけて築造された白山神社古墳・御旅所古墳・二子山古墳において埴輪列ないし埴輪の出土が確認されており、この時期は尾張地域における古墳築造・埴輪生産の最盛期に相当する。

埴輪は、尾張型円筒埴輪(尾張型埴輪)とよぶ地域性の強い、

特徴的なもので、轆轤成形など須恵器の製作技法の応用と窖窯(須恵器窯)焼成により、規格性が強く、須恵器同様に灰色硬質の焼質を持つものが一定量含まれる。

2突帯3段を基本形とするが、二子山古墳をはじめ、大型の前方後円墳では3突帯以上が存在し、断夫山古墳(8突帯9段・器高116cm)を頂点として、古墳の墳形・規模に対応した埴輪の階層的な規格構成(2突帯3段の基本形では器高約25cm～約45cm)が成立する。

形態上は、口径と底径の差が小さい筒形から口径が大きく上回る逆台形へと変化し、突帯の位置・割付が(器高に対して)中心寄りに口縁部と基底部の高さが等しいものから、底部寄りに口縁部が高く、基底部が低いものへと変化する。この変化は、古墳への配列に伴う基底部の埋設行為(埋設用の掘形の省略化)との関連が推測される。二子山古墳では筒形と逆台形が混在することから、埴輪の型式変化は二子山古墳の築造過程で生じた可能性が高く、埴輪祭祀の最盛期と同時に量産化に伴う簡略化や祭祀そのものの形骸化が認められる。



くびれ部周溝内遺物出土状況(南西から)



くびれ部調査地点全景(北東から)



下原古窯跡群出土不明埴輪



白山神社古墳出土不明埴輪

白山神社古墳出土 謎の「埴輪」

不明埴輪と仮称した謎の「埴輪」は、他に類例がなく、埴輪に分類することの適否を含め、形態・用途など、全てが未解決の器物である。

白山神社古墳の出土事例では、板状の破片には幅に大小があり、全体規模にも大小様々な規格が想定される。最大級の破片として、幅16.8cm・長さ25.4cmのものがあり、左右対称とした場合、全形は40～50cm以上と考えられる。厚さも2～3cmに及び、重厚長大で、須恵器的な灰色硬質焼成が主体的で(焼成不良で軟質な物も混在)、粗いハケ調整、板状粘土の貼り合わせによる成形を特徴としている。

また、横ハケのみ・横ハケ後縦ハケによる調製手法や縦位置で乾燥～焼成したことから想定される表裏・上下左右の区別が存在する。端部は隅丸状に整形するが、全体が方形から円弧に近いものの形態差のほか、直径1cmほどの小円孔を穿孔するもの、平坦なものと反り返るものがあり、諸要素の組合せ・法量分化により、多様な型式が存在する。なお、穿孔・反り返りはいずれも横ハケ調整の面から、あるいは横ハケ調整の面に対してと

なっており、横ハケ調整のみの面が暫定的に表面と想定される。

白山神社古墳では、北側のくびれ部で一定量まとまって出土したほか、全ての調査トレンチにおいて、上段斜面～周溝にかけての各所で散在的に出土しており、墳丘上の広範囲に亘って大量配置した可能性が推定される。一方、全ての不明埴輪は形態・規模とも不明であり、多くが10cm以下に細片化し、細かく剥離した小片も多く認められる。重厚な不明埴輪が細片化する要因としては、人為的に破碎した可能性が高く、古墳築造当初の原位置を反映するものではなく、具体的な使用法は不明である。なお、不明埴輪における製作手順上の表裏・上下左右の区別が使用法に反映されたかは、推測の域を出ず、多様な型式差やくびれ部での密集した出土状況を考慮すると、単独のほか、複数の組成による使用法も検討課題である。

比較資料として、端部を除く形状やハケ調整等の製作手法は、味美古墳群の初源に位置付けられる白山藪古墳にて主体部・副葬品室に使用された埴に類似点が認められる。白山藪古墳では粘土槨の木棺の小口を平置きで重ねて閉塞する障壁、副葬品室では縦位置での区画状の配列に使用されていた。

現状での確認事例は、白山神社古墳・御旅所古墳・二子山古墳・南東山古墳のほか、生産窯として下原古窯跡群(下原窯)に限られ、味美古墳群を中心として下原窯との需給関係が想定される点も特徴的である。下原窯においても数量的には円筒埴輪に次ぐ量が確認でき、古墳での同時期・大量使用を前提としたものと考えられる。なお、古墳での出土状況は、埴輪列(円筒埴輪)や埴輪群像(形象埴輪)に混在しており、埴に類する内部構造への使用は否定的である。

「謎」の不明埴輪の使用法の解明は、白山神社古墳をはじめ味美古墳群における古墳祭祀・埴輪祭祀の独自性を示すことにつながり、被葬者一族の出自・性格等、古墳群の歴史的背景を探る重要な糸口となる。